「情報を活用する力」をつける

秋田大学助教授 ^{あへ}阿部 ^{のぼる}昇

一 「情報を活用する力」の大切さ

「情報」という場合、通常の書籍の文章などによるものだけでなく、新聞や雑誌、テレビやラジオ、インターネットといった媒体によるものも含まれる。いわゆる「マス・メディア」といわれる分野である。これからは、そういった情報を活用する力が特に重要になってくる。

私たちの生活では、実際には通常の書籍などよりも、新聞・雑誌、テレビ・ラジオ、インターネットなどといった媒体による情報のほうが、現在ではずっと身近である。子どもたちの生活でも、それは変わらない。というより、むしろ子どもたちのほうが、大人たちよりもそれらのメディアに親しみを感しているかもしれない。親しみを感しているだけではない。子どもたちは、それらのメディアからの情報を、大人以上に自然に取り入れ、それらから強い影響を受けている。場合によっては、学校の授業や生活指導、そして親たちの言動以上に、子どもたちのもの見方・考え方、行動のあり方に影響力をもつこともある。にもかかわらず、それらの情報をどう受け取り、どう判断したらいいかについての方法やスキルを、だれからも教わることはないままに、子どもたちは「マス・メディア」とかわっている。

どんな情報にも発信者の隠された意図が含まれている。「隠された」というと、常に発信者が明確な意図をもっているといふことになるが、発信者自身も意識していません。強い「意図」や「意味」を発生させていることもある。最近の戦争報道などは、その典型といえる。

発信者が明確に意図をもちつつ、情報を発信しているものとして「マーシャル」がある。が、公正・中立といわれるニュース報道にも、必ず発信者の「意図」や「判断」は含まれている。

そういったメディアの性格・仕組みを把握させ、メディアを主体的に解読するための力を子どもたちにつけていくことを、これからの学校教育では重視しなければならない。もちろんそこには、メディアについて吟味（評価・批判）や判断する力も含まれる。さらに、自ら情報を発信する力も大切である。

私は、これからの子どもたちが、世界と深くかかわるためには、主体的な「吟味力」「批判力」がぜひ必要であると考え、そして、それは、文字言語についてだけでなく、音声言語や映像などについての「吟味力」「批判力」でもなければならぬ。

そういった力はすべての教育活動で養っていくものであるが、特に「国語科」の担うべき部分は大きい。

二 「情報を解読する力」をつける

子どもたちが情報を解読していくための基礎は、国語科教育における説明的文章の指導にある。この指導を有効に行うことが、情報を読む力を育てることにつながる。とはいえ、通常の文章とは違う新しいメディア情報独自の解読方法もある。「こ」では、五年（下）の「伝え方を選んで、ニュースを発信しよう」を例に少し考えてみたい。

この単元は、メディアの仕組みの解明から始まる。「ニュースを伝える」という説明文によって、新聞、テレビ、ラジオのニュースが「それぞれ、どんな工夫をしているのか」が明らかにされていく。新聞の場合、「見出し」「前文（リード）」「そして」「本文」に、それぞれ工夫がある。「見出し」は、「そのニュースで伝えたいこと」の中心になる事柄を、すばり簡潔に表現したものである。だからこそ、その新聞記事の特徴が強く表れる。

そのことを、より際立たせるには、同じ出来事についての複数の新聞記事の見出しを比較することが有効である。例えば、三年前に行われた近鉄対ヤクルトの日本シリーズ第

「情報を活用する力」をつける

一戦の見出しも、打撃不振であった近鉄に関して、A新聞は「猛牛打線沈黙1安打」としているのに対し、Y新聞は「猛牛沈黙中村3三振」としている。「沈黙」は同じだが、A新聞が近鉄打線が1安打しか打てなかったことを示している代わりに、Y新聞は近鉄の主力打者の中村選手が三打席三振であったことを示している。A新聞は中村のことを、Y新聞はチーム全体で1安打であったことを、見出しでは捨てたともいえる。そして、「この見出しは、その後の二百字程度の」「前文(リード)」の書き方にも、そのまま反映されている。Y新聞は、リードでも主力打者の中村選手、さらにはローズ選手がまったく打てなかったことを取り上げている。が、A新聞はまったくそのことには触れていない。その代わりにA新聞は、ヤクルトに先制点をもたらした若村選手のヒットのことが示されている。Y新聞は若村選手はまったく取り上げていない。

「本文」も、その「見出し」「前文(リード)」と同じ流れて、書かれている。新聞、テレビ、ラジオなどの「ユース」は、同じ出来事であっても、極めて多くの要素の中から発信者がぎりぎりの条件の中で取捨選択をして、「事実」を示していることを、子どもたちに学ばせていく必要がある。また、取捨選択だけでなく、選び取った要素を、どの程度の具体度で、どついつた観点から述べるかということによっても、大きく「事実」の見え方が違ってくる。それは、文章だけでなく、映像や写真についてもいえることである。そついつた多様なメディアの仕組みや解読の方法を、少しずつ子どもたちに学ばせていく必要がある。

三 「情報を発信する力」をつける

この單元では、次に情報解読を生かして「新聞」「校内放送」「全校テレビ放送」のいずれかの情報発信をすることになる。

「新聞」の場合だと、新聞記事の書き方の「特ちょう」「や」「注意するところ」を確認した後で、「本文」「前文(リード)」「見出し」を書いていく。ここで、取捨選択などの情報解読の方法が生かされる。さまざま要素の中から子どもたちは「スミス先生、ようこそ」と、英語で書いた模造紙をはってスミス先生を歓迎したという要素を「事実」として選択している。また、見出しを作成する過程では、元川くんが「いちばん知らせたいこと」は何かな。「とつ」形で、同じく取捨選択を意識している。言語化された「事実」は、すべて発信者によつて取捨選択されたものであるということとを、今まで学校教育で子どもたちに十分に教えられてこなかった。子どもたちは、自分がその過程を体験するにつれて、そのことを身をもって学ぶことになる。

「校内放送」の発信では、「どんな順序で放送するか」を意識化させている。同じように選び取った「事実」でも、どのような順序で発信するかによつて情報の意味も効果も違ってくる。「全校テレビ放送」では、当然「テロ撮影が必要となる。実は、この「テロ撮影と編集でも、先ほどの取捨選択が大きな意味をもつ。何を「テロ」に収めるか、それもどの程度のズームでどの角度から撮影するかによつて、「事実」の見え方が大きく変わる。また、その後の編集によつても違ってくる。編集は、取材した素材を、時間の制約の中でさらに厳しく取捨選択する作業だからである。さらに、映像と放送台本の組み合わせも配慮する必要がある。そついつた「テロ映像」さらには写真の解読ということも、これからの情報活用では重要になる。映像も写真も、その仕組み・仕掛けを知らないこと、十分には読み切れない。当然、発信する際にも、効果的な映像発信、写真発信ができないことになる。

「情報を解読」「情報を発信」という筋道が、典型的なものではない。が、実は子どもたちは「発信」をしながら、その「解読」の方法・スキルも学んでいる。情報の「解読」と「発信」、さらには先に述べた説明的文章の読解等を立体的に組み合わせることによって、より質の高い情報活用能力が育っていく。